

山陰に息づく「一式飾り」の習俗（4）  
—島根県雲南市掛合町を事例として—

高橋 健司

Folkways of “Isshiki-kazari” in the San-in Region (4)  
: A Case Study of Makeya-cho, Utsunomiya City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第19巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 19 / No. 2

令和4年12月16日発行 December 16, 2022

# 山陰に息づく「一式飾り」の習俗（４）

－ 島根県雲南市掛合町を事例として －

高橋健司\*

Folkways of "Isshiki-kazari" in the San-in Region (4)  
: A Case Study of Kakeya-cho, Unan City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji\*

キーワード：「一式飾り」、民俗造形、「見立て」の趣向、「風流（ふりゅう）」、作品の一回性、風物詩

Key Words: "Isshiki-kazari", Folk Modeling, Device of "Mitate", "Furyuu", One-time Work, Seasonal Tradition

## Ⅰ. 島根県雲南市掛合町の「掛合一式飾り」

### 1. 「掛合一式飾り」の歴史

「一式飾り」とは、山陰の六つの地域（鳥取県の南部町法勝寺地区、島根県の出雲市平田町、出雲市斐川町直江地区、雲南市掛合町、奥出雲町横田地区、奥出雲町下横田地区）において、地域の祭りで飾る作品を、住民が町内ごとに陶器一式、漆器一式といった同種の生活道具のみを用いて制作する民俗造形であり、それは年中行事として世代を超えて受け継がれ、地域の暮らしに息づく習俗である<sup>1</sup>。

このうち、島根県雲南市掛合町の「掛合一式飾り」は、江戸時代に始まったとされる出雲市平田町の「平田一式飾り」や出雲市斐川町直江地区の「直江一式飾り」に比べると開始が遅く、明治時代末の1904～1905（明治37～38）年の日露戦争の凱旋祝賀行事の一端として飾られたのが始まりとされ、その後も祝賀行事などの際に飾られてきたが、当初は「今日見るような本格的なもの」ではなく、「いわゆる人形飾り式のもの」であったと伝わる<sup>2</sup>。

それが大正時代になると「本格的な一式飾りとして成長した」とされるが<sup>3</sup>、その当時の作品の記録は見つかっていない。そして昭和時代には、戦時下で野菜を用いて作品を飾っていたと記憶され<sup>4</sup>、「掛合一式飾り」は何とか継続されたが、戦争が激しさを増すと休止になった。

こうした休止を経て、戦後に「掛合一式飾り」は復活し、「終戦後、全国的にまき起った民芸の復興に刺激されて、この一式飾りを掛合町町部の厚生会が主体となり、商工会の援助と相まって真剣にとりあげ

先進地平田町との交流をはかりつつ研究努力が積み重ねられ」た結果、「掛合一式飾り」は「先進地に勝るとも劣らぬ出来栄え」になったとされる<sup>5</sup>。

### 2. 恵比寿祭りとは「掛合一式飾り」

雲南市掛合町は、中国山地の山間にあり、町部の掛合地区は広島へと続く街道沿いの宿場町として江戸時代から栄え、山手から上町、中町、下町の三つの町内が順に並んでいる。

このうち上町には造り酒屋の竹下本店と醤油を醸造する竹下醤油店があり、中町では近年まで宿屋が営業するなど、掛合は多くの商家が軒を連ね、街道を往来する人で賑わった。また江戸時代に美保関の美保神社から勧請して祀った恵比寿神の祠が上町の竹下本店の敷地に建つ<sup>6</sup>。毎年8月20日の夕方になると、この神祠の前で図1の神事が執り行われ、図2の子どもたちが神輿を担いで町の通りを練り歩く光景が見られる<sup>7</sup>。

これが掛合の夏祭りとして知られる恵比寿祭りであり、戦後の「掛合一式飾り」は、恵比寿祭りに彩りを添えるものとして飾られてきた。作品は上町、中町、下町の三つの町内の住民が、毎年それぞれの町内の組ごとに集まって制作し、各町内2作品、合計6点の作品を、通りに面した家屋に飾って祭りの前日から公開し<sup>8</sup>、祭りが終われば作品を解体する。そして近年は地元の雲南市立掛合中学校の生徒が制作した作品も、恵比寿祭りで飾るようになった<sup>9</sup>。

掛合一式飾り保存会副会長の竹下紘一氏（昭和18年生）によれば、昭和30年代ぐらいまで「掛合一式飾り」の作品には、金物一式、仏具一式、刀一式、ガラス瓶一式、団扇一式といった多種多様な道具が

\*鳥取大学地域学部地域学科

使用され、竹下氏は団扇一式のクジャクの作品や、刀一式のカキツバタの作品などが恵比寿祭りで飾られたことを記憶している。

また、当時は平田町から人を招いて作品審査を頼み<sup>10</sup>、作品コンクールを盛んに行っていたが、審査結果を巡って諍いが生じ、作品展示を中止した町内も出たことから、やがて作品コンクールは取りやめとなった。

そして1960(昭和35)年7月の「広報掛合」に掲載された「掛合一式飾り」の記事には「特にこの一式かざりの力強い点は、他のように専門家のみでかざると異なり、町部各組々の創意工夫によって、組々の人々を挙げてかざられる点である。ここに真に地方色豊かな民芸をなしているものと云えよう」と記され<sup>11</sup>、各町内の住民が熱心に「掛合一式飾り」の制作に取り組んだ様子が窺える。

さらに「広報掛合」には「掛合一式飾り」が「祭に一段の光彩を放っており、隣接町村からの鑑賞の人々も年々多くなって来た」と記されて<sup>12</sup>、当時は「掛合一式飾り」を覗ようと近隣からも大勢の観客が恵比寿祭りを訪れ、夏祭りが盛況であった様子も分かる。

その後、昭和40年代になると掛合の商工会が中心となって九州の有田へ陶器を大量に買い付けに行き、購入した陶器を各町内で保管して作品の制作に繰り返し使用するようになり、現在のような「掛合一式飾り」のすべての作品が陶器一式で制作される形になった。

現在、掛合では人口減少が進む一方で、恵比寿祭りが開催される8月20日だけは、町を離れた家族が「お盆には帰省しなくても夏祭りには帰って来る」と言われるほど、町が大勢の人で賑わい、恵比寿祭りは地域の人々に愛され続けている。



図1 恵比寿神を祀った祠の前で行われる神事  
(2012年 筆者撮影)

竹下紘一氏によれば、掛合の住民や出身者にとって恵比寿祭りは「地域のつながりを確認する場」であり、恵比寿祭りで飾る「掛合一式飾り」も、竹下氏が「単に作品を作るだけでなく、作業を終えて同じ組の人たちとお酒を一杯やるのが楽しみ」と語るように、作品の協同制作を通して住民がコミュニケーションをとり、地域の親睦を深める場になっていると言えよう。

## Ⅱ. 「掛合一式飾り」の「見立て」の趣向

先述のように、掛合では「先進地平田町との交流」をはかって「一式飾り」の「研究努力」したとされるが、筆者が掛合で調査したところ、町内には他地域の祭りを訪れて「一式飾り」を撮影した古い写真が多数残されていた<sup>13</sup>。それは平田町の「平田一式飾り」の作品のみならず、斐川町直江地区の「直江一式飾り」や奥出雲町横田地区の「一式飾り」の作品まで含まれている。

掛合以外の島根県内の地域では、すべて7月の祭りで「一式飾り」を飾ることから、唯一8月に恵比寿祭りが開催される掛合では、住民が作品を制作する前に他地域の「一式飾り」を見学して観察する時間があり、各地の「一式飾り」の研究に熱心に取り組んできたと言える。

そして掛合では、その研究成果を「掛合一式飾り」の制作に活かし、作品に「見立て」の趣向を凝らしている。この「見立て」の趣向とは、「平田一式飾り」をはじめ山陰各地の「一式飾り」に共通して用いられる技法で、江戸時代に上方をはじめ各地の祭りで飾られた「造り物」に用いられたことから、「造り物」が「一式飾り」のルーツと考えられている。

江戸時代の「造り物」に詳しい美術史研究者の木下直之は、「造り物」に用いられる生活道具の「見立



図2 恵比寿祭りの子ども神輿  
(2015年 筆者撮影)

ては「材料とイメージの落差が、大きければ大きいほど楽しみも大きくなる」と指摘する<sup>14</sup>。

また、民俗学研究者の西岡陽子も「一式飾は見立ての遊びである。リアルな造形を目指すものではない。日常的な生活用品がいかに変身するか、が面白いのである。材料と表現されているものとの距離を楽しむのである。遠くからみればいかにもそれと見えるものが、近くによって子細に観察すると、それぞれの材料が自己主張している。だからその組み合わせが意外なほど効果は大きい。ふさわしい材料というのはこのことである」と指摘し<sup>15</sup>、山陰の「一式飾り」は、江戸時代から続く「見立て」の趣向の伝統を受け継いでいる。

このような「見立て」の趣向を、掛合の人々は他地域の「一式飾り」に学び、それを体得して「掛合一式飾り」に取り入れたと言える。中でも作品に陶器のカエルの置物を用いる趣向は、「見立て」の妙が味わえ、観客の人気を博している。

そこで「掛合一式飾り」のカエルの置物の使い方をみると、まず図3は2015年8月に下町中組が陶器一式で飾った「高崎山の赤ちゃんザル シャーロットちゃん」という作品で、これはイギリスの王室に誕生したシャーロット王女にあやかって赤ちゃんザルに命名して話題となった大分県別府市高崎山のサルの親子を造形している。この作品は、遠目にはサルの親子の顔に見えても、図4のように近寄って見れば、それが逆さまにしたカエルの置物であることに気づき、作品の材料とイメージの落差に驚くと同時に、「見立て」の面白さに笑みが浮かぶ。

次に図10の「孫悟空」は、図3と同じ2015年8月に、中町下組が飾った作品で、陶器一式で孫悟空が筋斗雲に乗って滑空する場面を造形している。この作品の孫悟空の顔にも逆さまにしたカエルの置物

が用いられ、下町中組と同様の「見立て」の趣向を凝らしている。当時「孫悟空」は映画化されて人気があり、また同年7月には「直江一式飾り」でも「平田一式飾り」でも陶器のカエルを用いて「孫悟空」の作品を飾ったことから<sup>16</sup>、それらを見て参考にした可能性も考えられる。

このカエルをサルの顔に見立てるといふ人気の趣向が、いつどこで始まったか不明だが、以前から島根県内各地で陶器のカエルは「一式飾り」の材料に好んで用いられ、奇抜な「見立て」が多くを観客を喜ばせてきた。それゆえカエルの「見立て」は「一式飾り」の腕の見せ所となり、作り手はカエルを巧みに見立てて観客の期待に応えようとする。

1777～78(安永6～7)年に江戸で興行された「とんだ霊宝」という「細工見世物」は、江戸時代に「造り物」が流行した契機と考えられるが、この「とんだ霊宝」を研究したクリストフ・マルケによれば、「とんだ霊宝」は魚の干物一式で作った仏像を飾るという「あらぬ物を見立て」た見世物が大評判となり、「おどけ開帳」の名で大阪でも同じ「細工見世物」が興行されて人気を博したとされる<sup>17</sup>。

江戸時代の人々にとって奇抜な「見立て」作品を見世物や祭りで見物することは、暮らしに彩りを添える娯楽であり、それは「他者と共感しあって体験するもの」であったとマルケは指摘する<sup>18</sup>。

山陰の「一式飾り」も、江戸時代の「細工見世物」や「造り物」と同様、祭りの場で「見立て」の面白さを他者と共感・共有することができ、身近な生活道具が作品に変身した姿を共に見て楽しむ習俗が、掛合のみならず山陰各地に息づいている。

このように「掛合一式飾り」の「見立て」の趣向は今も多くの人々を魅了し続け、ハレの日の祭りに彩りを添えていると言えよう。



図3 「高崎山の赤ちゃんザル シャーロットちゃん」  
(2015年 筆者撮影)

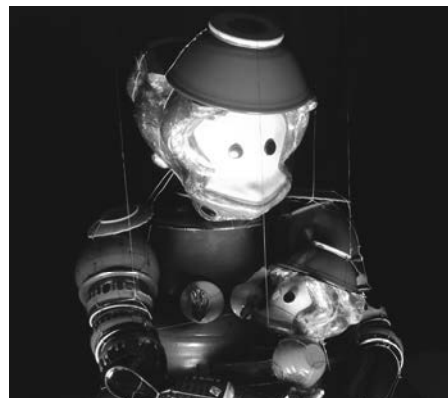


図4 カエルの置物で見立てたサルの顔  
(2015年 筆者撮影)

### Ⅲ. 灯火が照らす「掛合一式飾り」

山陰各地で「一式飾り」は「夜見るもの」という声をよく耳にするが<sup>19</sup>、それは掛合でも同様で、恵比寿祭りの開催中は、提灯が通りの至る所に飾られ、中には図5のような「奉祝」と墨書された古い提灯も目にする。また「掛合一式飾り」の作品が飾られる飾り宿にも提灯や行灯がいくつも吊られ、夕闇が迫ると点灯されて、街灯の少ない暗闇の中に作品が浮かび上がって見える姿が印象的である。

例えば、図6は掛合の中町下組の作品が毎年展示される飾り宿で、筆者は提灯や行灯が点灯された時間帯に、図7～14の作品を目にした。中町下組では、作品の題材に有名な物語・ドラマの主人公(図7「大国主命と白兎」、図10「孫悟空」、図11「弁慶参上」、図13「NHK大河ドラマ 西郷どん」)や伝統的な芸能や行事(図8「花田植」、図9「父と娘の盆踊り」、図12「掛合太鼓 四十周年」、図14「ホーランエンヤ」)を好み、どの作品も陶器一式で等身大の人物を造形している<sup>20</sup>。

こうした中町下組の作品は、灯火に照らされると色鮮やかに輝いて見え、作品に用いた陶器が灯火に映える。そして、作品の人物に陰影が生まれて立体感が増し、まるで作品に命が吹き込まれて動き出すように感じる。このような灯火の劇的な効果により、観客は「一式飾り」が醸し出す不思議な世界に引き込まれてゆく。

もし同じ作品を日中に観れば、作品を飾り宿の天井の梁から吊り下げる針金が目立つが、夜間は針金が見えなくなり、鑑賞の邪魔をしない。「一式飾り」は「夜見るもの」と言われる理由は、暗闇が余計なものを消し去る効果にもあったと言える。

江戸時代に各地の祭りで「造り物」が飾られるようになったのは、上方で出版されて全国に広まった

『造物趣向種(つくりものしゅこうのたね)』に負うところが大きい<sup>21</sup>、この本には様々な道具一式を用いた「造り物」の作品の絵が多数掲載され、それが各地の「造り物」や「一式飾り」の作品の手本として用いられている<sup>22</sup>。

合計4回も出版された『造物趣向種』のうち、1837(天保8)年に出版された『四季 造物趣向種』の序文には「古寺の砂持、或は地藏尊の御祭りなど、作物てふたはふれなくては、ともし火にあふらのなきに似たり」(古寺の砂持ちの行事や地藏尊の祭りなどに、造り物という戯れがなければ、油の切れた灯火のようだ)と記され<sup>23</sup>、「造り物」を灯火に例えていることから、既に江戸時代から灯火が作品展示に重要な役割を果たしていたと考えられる。

これに関して、芸能文化史研究者の守屋毅は「地方にあって、江戸時代、ことに中期に発展した都市祭礼には、夜をあざやかな灯火で飾る風流の開発を顕著に看取することができる」とし、都市祭礼における灯火の「風流」の重要性を指摘する<sup>24</sup>。守屋が用いた「風流」は「ふりゅう」と読み、それは風情を指すのではなく、祭礼において奇抜な意匠で人目を驚かさす趣向を意味する。

この灯火の「風流」について、民俗学研究者の福原敏男は「本来、祭りの時間は夜である」として、「ハレの夜における灯り、提灯、行灯、花火、灯籠などは、祭り・芸能・イベントを彩る飾りであり、心をそぞろに、気分を盛り上げる、集客のための誘引や賑わいの演出装置」であり「戦前まで戦意高揚や皇室イベントへ祝意を示す定番であった提灯行列は、上記のような灯火行事の心的効果を利用した国民統合儀礼であった」と指摘する<sup>25</sup>。

このような古風な趣向を、掛合では今も目にすることができる。それゆえ観客は「掛合一式飾り」に、どこか懐かしさを覚えるのではないだろうか。



図5 恵比寿祭りで飾られた提灯 (2016年 筆者撮影)



図6 点灯された飾り宿 (2012年 筆者撮影)



図7「大国主命と白兔」（2012年 筆者撮影）



図8「花田植」（2013年 筆者撮影）



図9「父と娘の盆踊り」（2014年 筆者撮影）



図10「孫悟空」（2015年 筆者撮影）



図11「弁慶参上」（2016年 筆者撮影）



図12「掛合太鼓 四十周年記念」（2017年 筆者撮影）



図13「NHK大河ドラマ 西郷どん」（2018年 筆者撮影）



図14「ホーランエンヤ」（2019年 筆者撮影）

#### IV. 季節の風物詩としての「一式飾り」

掛合ではコロナ禍のため、2020年から恵比寿祭りが中止され、8月20日は神事のみが行われている。こうした状況でも、上町の二つの組だけは「一式飾り」を神事に合わせて飾り続けている。

コロナ禍も3年目となる2022年8月、掛合の上町は2点の作品を飾り、上町1組は図15の「横綱土俵入り」を、上町2・3組は図16の「どじょうすくい」を飾った。どちらの組の作品も陶器一式で制作され、上町でも小型のカエルの置物を人の拳に見立てる趣向が共通して見られた。

他の町内が「一式飾り」を休止する中、上町で作品を飾り続ける理由を上町在住の竹下紘一氏に伺うと、竹下氏は「上町は恵比寿さんのお膝元だから」と語り、神祠が建つ上町では「一式飾り」は「恵比寿さんへの奉納物」という思いが強く、それが「一式飾り」を制作・展示する動機となっている。上町の人々にとって「掛合一式飾り」は単なる娯楽ではなく、「平田一式飾り」や「直江一式飾り」と同様、地域の信仰と深く結び付いたものと言える。

そして神に奉納された「一式飾り」は、祭りの期間を過ぎれば解体されるのが宿命であり、作り手は毎年新たに作品を制作して飾ることを繰り返している。このように「一式飾り」は美術作品のように常設展示されるのではなく、祭りの期間限定で飾られ、作品の一回性が重んじられてきたが、そこには地域の人々のどのような思いが込められているのであろうか。

これに関し、2004年に三重県立美術館で開催された「まつりの造形」展には、日本各地の祭りを彩る造形物が集められて展示され、造形物を「まつりの度に繰り返しつくる」行為が注目されている。同館学芸員の土田真紀は「まつりが、またくまつりの造

形>が本来生きていた時間は、現在我々が実感しているような過去から未来へ流れる直線的時間ではなく、無限に繰り返される、いわば『円環する時間』であったにちがいない。1年のある決まった日、決まった時間に毎年行われるのがまつりである」とし、そこには「一定の周期があり、しかもその繰り返しのリズムの基本には何らかの自然のリズムがあると考えられる」と指摘する<sup>26</sup>。

山陰の「まつりの造形」である「一式飾り」にも、造形と解体を繰り返す周期的なリズムがあるが、こうした造形を行う人間の心理について土田は「怨霊が疫病をはやらせるのも、あるいは行き場の精霊が現れるのも1年のある時期であり、その頃に御霊会が行われたり、念仏踊りが行われたりしたのである。かつてはそれほど人間が自然の力を強烈に感じ、またその影響を直接に蒙りながら暮らしていたことの裏返しともいえるだろう。本当に切実な思いをこめてまつりが行われ、芸能が奉納されていたのであろう。春、夏、秋、冬と1年の周期で死と再生を繰り返す自然の旺盛な生命力に祈りつつ、人もまた毎年新たな気持ちでまつりに臨んでいたにちがいない。くまつりの造形>がそのたびごとに新たに作られるべきものであるのも当然であった」と読み解く<sup>27</sup>。

土田が指摘するように、奉納物として制作される「一式飾り」には、地域の人々が自然の再生を祝い、豊穰を祈る思いが込められているのではないだろうか。その思いが「一式飾り」を毎年新たに造形しては解体する行為となり、その周期的なリズムが季節の移り変わりとなっていて、夏の終わりに飾られる「掛合一式飾り」の姿は、人々の目に季節の風物詩と映る。

換言すれば「まつりの造形」とはすなわち「祈りの造形」であり、そこに込められた地域の人々の素朴な願いは、世代を超えて現在まで受け継がれていると言えよう。

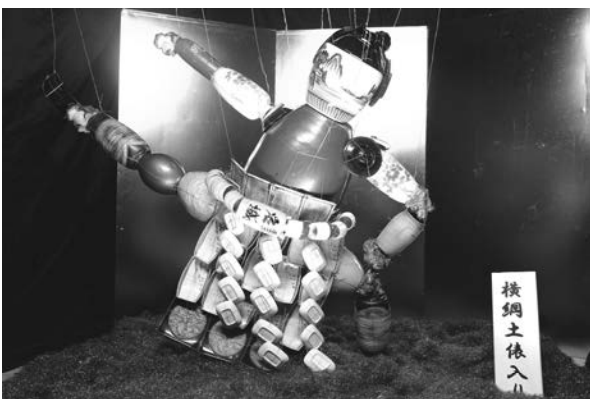


図15「横綱土俵入り」(2022年 筆者撮影)



図16「どじょうすくい」(2022年 筆者撮影)

## 謝辞

筆者のフィールドワークに際し、ご支援とご教示を賜った掛合一式飾り保存会の竹下紘一副会長と影山峯万氏に心より御礼申し上げます。また筆者が取り組む鳥取大学地域参加型研究プロジェクト「山陰に伝わる『一式飾り』の価値の探究と継承」に対し、ご支援頂いた鳥取大学地域価値創造機構に感謝申し上げます。

## 注

- 1 山陰の「一式飾り」と西日本各地の「造り物」については、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（1）－鳥取県南部町法勝寺地区を事例として－」『地域学論集』第17巻第2号、鳥取大学地域学部、2020年、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（2）－島根県出雲市平田町を事例として－」『地域学論集』第17巻第3号、同、2021年、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（3）－島根県出雲市斐川町直江地区を事例として－」『地域学論集』第18巻第2号、同、2021年、並びに以下の研究調査報告書を参照されたい。『「一式飾り」調査報告Ⅰ 若者の視点から見た「一式飾り」』鳥取大学地域学部高橋健司研究室、2014年、『「一式飾り」調査報告Ⅱ 地域教育を通じた「一式飾り」の継承』同、2015年、『「一式飾り」調査報告Ⅲ「見立て遊び」の伝統の継承』同、2016年、『「一式飾り」調査報告Ⅳ「一式飾り」の価値の探究と継承』同、2017年、『「一式飾り」調査報告Ⅴ「一式飾り」に見る伝統の持続性』同、2018年、『「一式飾り」調査報告Ⅵ「一式飾り」に見る「見立て」の創造性』同、2019年、『「一式飾り」調査報告Ⅶ「一式飾り」に見る「風流」の伝統』同、2020年、『「一式飾り」調査報告Ⅷ コロナ下における「一式飾り』』同、2021年、『「一式飾り」調査報告Ⅸ 続・コロナ下における「一式飾り』』同、2022年。
- 2 「掛合町広報」第50号、1960年7月。また、木下直之によれば、日露戦争以前の1894（明治27）年12月9日に開催された日清戦争の東京市祝捷大会においても、日清戦争の戦勝を祝って「見立て細工」による様々な作り物が飾られたと記録されている。木下直之「浅草と上野、あるいは見世物と博覧会について」『大見世物～江戸・明治の庶民娯楽～』たばこと塩の博物館、2003年。
- 3 『島根県観光辞典』島根県観光連盟、1997年再版（1984年初版）、166頁。
- 4 中町下組の影山峯万氏（昭和6年生）のご教示による。
- 5 「掛合町広報」第50号、1960年7月。
- 6 『掛合町史』によれば、上町の恵比寿神社は1760（宝暦10）年に勧請されたと伝わり、1907（明治40）年に神社合祀策により廃社となって、その後長い間信仰が途絶していたが、第二次世界大戦後に再勧請されている。掛合町誌編集委員会編『掛合町誌』掛合町誌刊行会、1984年、782頁、789頁。
- 7 子ども神輿には、恵比寿祭りに帰省した掛合町出身者の子どもたちも多数参加している。
- 8 恵比寿祭り前日の8月19日は火伏の神である秋葉大明神の祭日に当たり、「掛合一式飾り」は19日と20日の両日に飾るのが習わしとなっている。
- 9 2009年から地元の雲南市立掛合中学校の授業の一環として、掛合一式飾り保存会の竹下紘一副会長や影山峯万氏らが、中学生に「掛合一式飾り」の制作指導を行い、恵比寿祭りで各町内の作品と一緒に中学生の作品も飾っている。
- 10 平田一式飾り保存会の記録には1954（昭和29）年8月に「飯石郡掛合町の要請を受け掛合町一式飾競技大会の審査指導に行く」と記されている。西岡陽子監修『平田一式飾』平田一式飾保存会、2003年、39頁。
- 11 「掛合町広報」第50号、1960年7月。
- 12 同上。
- 13 中町下組の影山峯万氏のご協力により、同組に保管されている写真を拝見させて頂いた。
- 14 木下直之「いま見世物を見ることについて」『上方下りの妙技 大坂の細工見世物』INAX GALLERY NEWS No. 8、1992年。
- 15 西岡陽子監修、前掲書、54頁。
- 16 2015年の「平田一式飾り」の「孫悟空」については、前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（2）－島根県出雲市平田町を事例として－」を、同年の「直江一式飾り」の「孫悟空」については、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗（3）－島根県出雲市斐川町直江地区を事例として－」を参照されたい。
- 17 クリストフ・マルケ「江戸の寺社開帳をパロディ化した見世物『とんだ霊宝』」『アジア文化研究 別冊』18号、アジア文化研究所、2010年、50頁。
- 18 同上。
- 19 鳥取県南部町法勝寺地区では毎年4月の南部町さくらまつりに合わせて「法勝寺一式飾り」を飾るが、法勝寺では日が暮れて赤い提灯が点灯されてから、作品の見物に出掛ける住民が少なくない。
- 20 影山峯万氏によれば、かつて中町下組では通りの向かい側にあった広いスペースの飾り宿を利用し、そこが老朽化して使えなくなるまで、人物を何体も飾ったり、動きのあるダイナミックな作品を飾ったりした。
- 21 「造り物」を描いた絵本『造物趣向種』は江戸時代から明治時代にかけて4回（天明7年版、天保8年版、安政7年版、明治の復刻版）出版され、全国各地に広まっている。



- 22 鳥取県南部町法勝寺地区には明治時代に復刻された『四季 造物趣向種』が現存し、同書に掲載された作品を手本として、近年まで「法勝寺一式飾り」を制作していた。また、この本には刀一式で制作した図17の「杜若（かきつばた）」も掲載され、この絵を参考にして、竹下紘一氏が見た「掛合一式飾り」のカキツバタの作品が制作されたと考えられる。
- 23 鬼拉亭力丸「序」鬼拉亭力丸編・松川半山画『四季 造物趣向種』河内屋藤兵衛ほか出版、1837（天保8）年。
- 24 守屋毅「夜景と都市祭礼」『近世芸能文化史の研究』弘文堂、1992年、158頁。
- 25 福原敏男「雨乞の灯火風流 幕末兵庫津の事例」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集、国立歴史民俗博物館、2004年、252頁。
- 26 土田真紀「<まつりの造形>展ノート」三重県立美術館編『【まつりの造形】展図録』（財）三重県立美術館協力会、1984年。
- 27 同上。



図17「杜若」『四季 造物趣向種』（筆者所蔵）